

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	トランスランゲージングが大学生の英語ライティングに与える影響				
研究組織	代表者	所属・職名	言語コミュニケーション 研究センター・特任講師	氏名	相羽 千州子
	研究分担者	所属・職名	芝浦工業大学他・非常勤講師	氏名	出水 純二
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	言語コミュニケーション 研究センター・特任講師	氏名	相羽 千州子

講演題目	トランスランゲージングが大学生の英語ライティングに与える影響－語彙多様性に着目して－
------	--

研究の目的、成果及び今後の展望

研究の目的：CLIL（内容言語統合型学習）の枠組みでは、意味のやり取りと思考を重視する観点から目標言語と母語を併用するトランスランゲージングが提唱されてきた。大学教養課程の英語の授業において英語でアウトプットを求めることは一般的となっているが、その準備段階での日本語の使用については議論がある。本研究は、インプットにおける日本語の併用がアウトプットの英語ライティングに与える影響を明らかにすることを目的とした。CLIL の内容中心の指導法では語彙多様性が高まるとされており、本研究では、語彙多様性の指標の一つである D 値をウェブツール Text Inspector で測定することとした。

研究の成果：4 大学 8 クラスの計 172 人の学生に対し、授業内容に関連したビデオを視聴した後に 60～100 ワードの英語で書く課題を 2 回課した。1 回は日本語字幕付き、もう 1 回は英語字幕のみであり、前者にはインプットにおけるトランスランゲージングが伴う。収集したテキストデータの D 値を測定し、統計処理した結果、1) 日本語字幕の有無は語彙多様性に影響しない (Table 1)、2) ほとんどのトピックについて D 値は平均 55～85 で安定し (Figure 1)、EFL 学習者の書きことばとして想定される範囲内にある、の 2 点が明らかとなった。成果は、3 月 14 日、56th RELC International Conference (シンガポール、オンライン) において発表した。

今後の展望：1) 研究成果の 2 点目に関連し、数学関連のトピックに関するライティングは、D 値が有意に低かった (Figure 1)。今後、収集データから学習者コーパスを作成し、質的な分析を加えることにより、その理由、さらにはトピックと英語ライティングの関連について新たな知見を得ることが目指される。2) 今回収集したデータに関し、語彙密度はトピックによって容易に変化した。語彙多様性は相対的に安定した指標と言え、英語ライティングの縦断的調査や大規模調査にも利用できる可能性がある。

Table 1 Two way ANOVA table for effects on language and topic on D value

Cases	Sum of Squares	df	Mean Square	F	p	η^2
Lang	0.726	1	0.726	0.002	0.967	3.299e-6
Topic Pair	89802.702	4	22450.675	52.732	<.001	0.408
Lang * Topic Pair	1793.175	4	448.294	1.053	0.380	0.008
Residuals	128576.227	302	425.749			

Note. Type III Sum of Squares

